

# 令和3年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習支援 (小学部 低学年)	a 児童の自ら人や物に関わる姿を引き出すための教師の支援(児童への働きかけや関わり方、声かけの仕方、環境設定)について教師間で検討し、共通理解を図る。	教職員が学部研究における発達段階に応じた関わり方等についての研修など2年前から継続して取り組んできたことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、特に「声掛けや働きかけ」や「環境設定」が適切であったなど高い評価(満足度100%)を得られた。	今後も継続していくために、次のことに取り組んでいく。 ①引き続き、学部研究で発達段階に応じた関わり方等についての研修を行う。 ②教職員間で児童の発達段階や実態に共通理解を持ちながら、授業場面だけでなく学校生活全体について、支援の充実を図る。
	b 一人一人の発達段階や実態に基づいた目標を設定し、その目標を達成するための課題設定に取り組む。	教職員が学部研究で発達段階を踏まえた支援の仕方を学んだり、授業研究を定期的に行い、動画を見て振り返りながら、児童の発達段階や実態に応じた適切な課題設定について具体的に話し合ったりしたことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、高い評価(満足度100%)を得られた。	今後も継続していくために、次のことに取り組んでいく。 ①日常の観察等から得られる児童の特性だけでなく、客観的なアセスメントを活用し、児童の発達段階や実態を把握し、教職員間で共通理解を持つ。 ②保護者や本人のニーズを踏まえたうえで、教職員間で定期的に話し合いながら、適切な課題設定に取り組む。
2 教育課程 学習支援 (小学部 高学年)	a 人に伝える力を高めるための支援方法について検討し、実践する。	教職員が、児童の実態を正確に把握するため、標準化されたアセスメントを学年全体で実施したり、児童の思いや理解を考えながら支援を検討したりしたことが、教師の意識を高める結果につながり、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、高い評価(満足度100%)を得られた。今後も人に伝える力について教職員間で共通理解しながら、実践していくことが必要であると考える。	今後も継続していくために、次の3点を大切にしていこう。 ①アセスメントを有効活用し、継続性のある学部単位の長期目標と、それを実現するための毎年の短期目標を念頭に置いて児童の伝える場面を意識した授業実践を行う。 ②教職員間で年度当初に人に伝える力について共通理解し、十分な話し合いと教材作り等の授業準備の時間を確保する。 ③保護者懇談において、児童の様子を的確に伝えたり保護者から聞き取ったりして、十分に共通理解を図る。
	b 集団に自ら参加しようとする意欲を引き出す指導の工夫に取り組む。	コロナ禍により今年度も学級単位の活動が中心となり、大集団で活動する機会が少なかったが、教職員が児童の活動集団の規模を工夫して取り組んだことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、高い評価(満足度96.9%)を得られた。今後も個に応じた集団活動への参加意欲を引き出す支援方法について、保護者と共通理解を図ったり、学年の取組を紹介したりしていく必要があると考える。	目標を達成できたが、集団活動を好まなかったり身辺処理等に時間がかかったりして、集団活動への参加が難しい児童もいる。このような児童に配慮しつつ、社会で自立できる児童の育成を目指して、次の2点を大切にしていこう。 ①児童の実態を把握し、個に応じた集団規模、集団活動への意欲を引き出す支援の方法を学部全体で工夫する。 ②保護者懇談等で、集団活動への参加方法や、必要な支援について話し合い、共通理解を図る。
3 教育課程 学習支援 (中学部)	a 生徒の発達段階やニーズを踏まえて教師間で協議し、具体的な目標を設定したり、支援方法を計画したりする。	教職員が、生徒個々の発達段階やニーズを踏まえて目標を設定し指導・支援することについては、目標(90%以上)を達成できた。一方で、実態が日々変化しやすい学齢期のため、設定した目標とのずれが生じ、目標設定を大きく修正するケースも見られた。 保護者からも、特に社会生活面や学習面での成長について高い評価を得られた。	設定した目標に対しての指導・支援の方向性、関わり方を、生徒の実態に応じて適宜、教職員間で具体的に協議し、必要に応じて目標や方法を修正しながら、実践していく。 保護者には、日々の連絡帳や学部だより、行事、保護者懇談などを通して、学校と家庭での姿を連絡し合い、学校からは積極的に子どもの変化や成長を感じてもらえるよう伝えていく。
	b 生徒の実態に応じ、学校行事や学部行事に向け、集団の中での役割や協力を意識した授業を行う。	教職員が、修学旅行や体育大会、文化祭などの行事に向けて、生徒一人一人に「集団の一員」としての意識が持てるよう取り組んだことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、コロナ禍で行事の参観の機会が少なかったが、高い評価(満足度93.3%)を得られた。	目標を達成できたが、今後も各行事活動において、生徒一人一人に適した役割や協力の仕方などの設定について考えていく。その際、生活年齢とともに、生徒の実態に配慮しながら、さらなる成長や自立を行っていき、実践していく。 保護者には、集団における役割や協力の仕方についての考えを連絡帳を通して話し合ったり、懇談の機会に、動画や写真を交えて実際の姿を伝えていく。
4 教育課程 学習支援 (高等部)	a 卒業後に必要な力を身に付けられるよう、生徒一人一人に応じた適切な課題を設定し、指導を行う。	教職員が、希望やアセスメントを通して学習班を編制するとともに、個々の活動設定や支援を丁寧に進めたことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からは、一部「成長が感じられない」という回答があったが、一定の評価(満足度92.6%)を得られた。今後も、より細やかに個々の生徒の実態を捉え、小さな成長も見逃さず、より丁寧に伝えていくことが大切と考える。	実態や適性の把握のほか、キャリア教育の一環として行う現場実習等での第三者評価などの客観的な評価をもとに、実践の見直しや授業の改善に取り組み、成果につなげていく。また、保護者との日々のやり取り、実習評価等を踏まえて共通理解を図るなど関係を密にし、信頼関係を築きながら個に応じた適切な指導の継続に取り組んでいく。
	b 生徒の働く活動について、活動内容や課題設定、生徒の様子について定期的に検討し、実践する。	教職員が、日々の授業の振り返りや話し合いを通して、授業内容の工夫、課題設定や支援の見直し等を行いながら、授業実践及び改善に取り組んだことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者も、日々の連絡帳や懇談等の機会に連絡が密にとられ、信頼関係と共通理解が図られていると感じており、高い評価(満足度98.2%)を得られた。	日々の実践から生徒の実態を踏まえた授業改善を適切に行うことができるように、教職員間の十分な話し合いと教材作り等の授業準備の時間を確保していく。また、保護者との積極的な情報交換によって信頼関係を築きながら、PDCAサイクルの実践を進めていく。
5 教育課程 学習支援 (訪問学級)	a 日々、一人一人の健康状態を把握し、感染予防に努めながら、適切な授業時間の中で、丁寧に関わる。	教職員が、朝の観察を基に看護師との情報交換を通して必要な情報を得た上で適切な授業時間を設定したことについては、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、コロナ禍による面会禁止が続いたが、高い評価(満足度100%)を得られた。今後は、児童生徒の様子を映像等を使って伝える方法を工夫していく。	児童生徒の状態把握のため、医師や看護師との情報交換を行い共通理解を持つことは大切であり、今後も継続していく。授業時間については、感染予防の点から、病室及び病棟全体の状況を見極め、医療側と連絡調整を行いながら、児童生徒に応じた時間を設定していく。保護者との連携は、継続して、電話や便り、映像等で児童生徒の様子を丁寧に伝えていく。
	b 人や物の存在に気付き関わろうとする学習内容や教材、支援の方法を考え実践する。	教職員が、授業後に児童生徒の様子や気になる点について活動を振り返りながら積極的に情報交換を行ったことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、児童生徒がどのような学習活動に取り組む、楽しんでいるかを記録した便り等について、高い評価(満足度100%)を得られた。	児童生徒についての話し合いで共通理解を図っているが、授業のほとんどが個別に実施しているため、互いの授業を見合う機会はほとんどない。児童生徒からの表出の読み取りの正確性や共通性、関わり方の適切さに等については、不十分な点があると思われるため、今後、授業の映像を記録し、検討する時間を設定して実践に生かしていく。

6	教育課程 学習支援 (寄宿舎)	a 寄宿舎生一人一人の実態や課題を職員間で共有し、適切な目標を設定して、統一した支援を行う。	職員が、コロナ禍でも、個に応じた目標設定と日々の実践により、子どもの成長に結びつけることができたと感じており、目標(90%以上)を達成できた。 保護者も、寄宿舎での共同生活で子どもが自立に向け成長したと感じており、高い評価(満足度93.6%)を得られた。一部「成長を感じられなかった」という回答もあるため、個別の目標設定や支援について、今後も真摯に対応していく。	リノベーション工事やコロナ禍による利用制限の中、寄宿舎で生活経験を積み重ねる機会が減り、子どもたちの変化や成長を保護者が実感できる機会が少なかったのではないかと推察する。「期待したほどは成長しなかった」という回答もあるため、今後、寄宿舎生一人一人の生活全般を細かく観察し、実態に即した支援をさらに工夫するとともに、子どもたちの様子について、丁寧に保護者に伝えていく。
		b 基本的な生活習慣が身に付くように、日常生活の中やライフタイム(生活指導)の時間の中で、一人一人に応じた支援の工夫に取り組む。	職員が、支援を工夫することで、寄宿舎生に基本的な生活習慣を身に付けることにつながっていると実感できており、目標(90%以上)を達成できた。 保護者も、個に応じた支援の成果を実感しており、高い評価(満足度95.8%)を得ている。一部「身に付かなかった」という回答もあり、さらなる工夫が必要である。	基本的な生活習慣が「身に付かなかった」という回答が一部あることから、今一度、子どもたちの生活全般を細かく観察し、一人一人の興味関心をよく確かめ、理解しやすい方法を判断した上で、視覚支援や支援グッズの活用、日常的な対話、ライフタイムなどでの支援を工夫して、基本的な生活習慣が家庭生活にもつながっていくよう取り組んでいく。
7	健康・安全	a 保健指導 児童生徒の行動や体調を把握し、教職員間で共通理解を図るとともに、けがの防止や病気の予防に努める。	新型コロナウイルス感染症への対策が学校全体で定着してきたことに加え、保健部を中心に教職員が、児童生徒に対する保健教材による指導や、体重測定後のミニ指導、けがをした際の対応策の指導等に取り組んだことで、目標(90%以上)を達成できた。一方で、自分で意識して行動することが難しい児童のために、環境を整えることも大切である。 保護者からも、高い評価(満足度97.4%)を得られたが、学校の病気やけがの予防対策が不十分と感じる保護者もいることから、今後の業務改善に生かしていく。	新型コロナウイルス感染症は、今後も予断を許さない状況であり、感染予防対策の徹底や新しい科学的知見の情報発信を引き続き行っていく。病気予防は、児童生徒に合わせた対応について、学部ごとに再確認しながら進めていく。けがの防止は、環境整備が必要な場合は早急に対応し、全校で情報を共有して再発防止に努めていく。 保護者には、子どもの健康状態や様子について、連絡帳等で十分に連携を取ったり、便りを通して学校の対応や方針への理解協力を促していく。
		b 安全指導 警察と連携して教職員の防犯研修を行い、学校の安全確保に努める。	指導部を中心に教職員が、警察署員による防犯研修を、校内にリモート配信して全教職員参加型にするなど工夫したことで、防犯意識が向上するなど、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からは、不審者侵入防止のための登下校時間帯以外の出入りの協力について、一定の評価(満足度88.5%)を得られたが、一部浸透していない状況も浮かび上がった。	教職員の防犯研修は、警察署員が来校し、校内リモート配信にて全教職員参加型で行ったが、通信機器の不具合により一部伝達できない部分もあった。来年度は、教職員一人一人が防犯について再度意識を高めることができるよう、実践を伴う研修を行い、不審者対応マニュアルの定着に努めていく。 保護者には、登下校時間帯以外の出入りの際の職員玄関での受付について周知徹底を図っていく。
8	生徒支援 進路支援	a 生徒支援(1) 体育大会や文化祭などの行事において、児童生徒の理解に努めるとともに、活動内容の創意工夫をして活動意欲を育てる。	昨年度に引き続きコロナ禍のため、体育大会や文化祭の行事は、平日開催、時間短縮、保護者観覧者数制限等の対応に加えて、消毒、健康観察の徹底等の協力を得ながら開催した。そのような状況下でも、教職員が、各学部において児童生徒が意欲を持って取り組めるように内容を検討・工夫したことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、高い評価(満足度97.4%)を得られた。	昨年度に引き続きコロナ禍のため、制限のある中で、学部毎の分散開催や開催形式はリモート配信など工夫して実施した。来年度も新型コロナウイルスの状況を踏まえながらの判断となることが予想されるが、開催方法が変更になった場合でも、各学部と担当校務部が連携し、児童生徒が意欲を持って取り組むことができるように、工夫を凝らした企画とスムーズな運営を行っていく。
		b 生徒支援(2) 児童生徒の人権意識や規範意識が高まるように心掛ける。	教職員が、研修等を通して人権に対する意識をより強く持って指導・支援を行ったことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、高い評価(満足度98.7%)を得られた。 一方で、「あまり行っていなかった」という教職員や保護者の回答が一部あることを、真摯に受け止め、教職員全体の共通意識として浸透させていく必要があると考える。	今後も、日々の児童生徒の不適切な行動や発言に気を配るとともに、その背景を丁寧に探りながら、教職員の質の高い指導・支援につなげていく必要がある。人権を貫くことは学校教育における基本であり、教職員一人一人が常に高い意識を持って児童生徒に接するように、研修を継続実施するなど人権意識や規範意識の醸成に努めていく。
		c 進路支援 将来の生活への関心・意欲が高まるように、進路に関する情報提供や進路学習の充実を図る。	教職員の取組や成果に関する評価は、高等部では高く小学部では低く、目標(90%以上)は未達成であった。小学部段階では、卒業後の社会生活など将来についてイメージを持たせることが難しいといった教職員の意識が反映されていると考える。 保護者の評価は、小学部段階でも高く、教師側の捉え方と保護者の評価にズレがある点にも着目する必要がある。コロナ禍により保護者対象の進路行事を開催できなかったが、進路通信や進路説明会資料等において丁寧に進路情報を発信した成果であると考えている。	コロナ禍のため、進路行事が中止になり保護者に進路に関する啓発が十分にできなかったが、タイムリーな進路情報を充実させて発信することで満足度が高かったことから、今後も継続して取り組んでいく。小学部教員からは「児童の将来や進路について関心・意欲を高めることが難しい」という回答が見られたが、小学部の児童にとっての進路(学習)とは、挨拶や返事、友達との遊び、係の仕事など、日々の学習の中での取組そのものが将来へのステップであるという意識を、教職員それぞれが十分理解する必要があると考える。今後、教職員に対しても、進路に関する研修・啓発に積極的に取り組み、系統性のあるキャリア教育を推進していく。
9	保護者・地域との連携	a 面談や送迎時等における児童生徒の状況確認の徹底と適切な対応を行ったり、連絡帳等での適切な情報伝達を行ったりする。	教職員が、家庭や利用施設と情報共有し、協力して指導・支援することを意識してきたことにより、目標(90%以上)を達成できた。 保護者からも、児童生徒の学校生活の様子を伝えようとする教職員の取組に対して、高い評価(96.2%)を得ている。 一方、「子どもの学校生活の様子がよく分からなかった」と回答した保護者も一部いることから、今後の情報伝達についてより分かりやすく伝える工夫が必要である。	保護者に児童生徒の情報をよりきめ細かく分かりやすく伝えるために、教職員間の意見交換をより積極的に行い、ICT機器を有効に活用しながら情報伝達していく。言葉や文字だけでなく、ICT機器を用いた写真や映像の提示を定期的に行うことで、児童生徒の学校での姿をより具体的に伝えられると考える。併せて、教職員の伝える力を高めるための研修等を通して意識向上を図っていく。